二回目の冬◇大村咲希

柑橘が生っているのを見るたびに写真を撮ってあなたに送る
おもしろいほど歩いたね　恐竜を二人で孵し育てた季節
しゃぼん玉したときあげた吹き口があなたの部屋の本棚にある
食べるのが下手だと笑いラーメンの汁を私の分も飲み干す
教室に時計はなくてきらきらと眠るあなたの腕からぬすむ
完璧にミカンを剥けてフリースを見分けられない指先を知る
次々とあなたに寄ってくる猫に名前をつけていくことにした

最近は一緒にいても眠りだす　ふたえの幅を指でなぞった

夢でみる東京駅は実際と全然違うらしい　世界は？

皮膚越しに血管を触るのが好きな人だから足の甲をさしだす

Bちゃんはあなたの声をほめた人　とりあえずまた何ちゃん？と訊く

「ふたえって目を瞑ってもわかるっけ？」こんな手にひっかからないでよ

アイライン引かせて　ここの青あざを押して遊んでいてもいいから

何本も中央線を見送った頃にもらったカイロの残り

階段の下でやっぱり振り返る　今日はソファーで寝ないようにね

灯火と蝶◇佐々木遥

冬の日の窓だけでなくそのなかでともる思考のことも見上げる
淡さなど持たないような顔をして、そして六法全書を手繰る
説得をする気はなくて裁判官の声を拾って読んでゆく昼
バス停に並んだ人がひとしきり記号になってゆくまでを見た
はるけさをあなたと読んでしまうたび脳のなかの花を濡らせり
"I made a mistake." だけ聴きとれてしまって冬の午後のさみしさ
美しい言葉は灯火、うつむいてそこに生まれるものを見ていた

過程では隠されているものとして便箋・貨物・死を挙げている

語るとき遠さが要るということにつめたい雨が容赦なく降る

それはそうともうすぐまぶたがおりてくるみたいに夕暮れがおとずれる

ゆうやみを見れば謝りたくなって　母と言う字の二滴の雫

試す、という語を口にする人々のなかにきらめく分岐点あり

投げられた言葉をひろう、ひろうときどうやっても指先が傷つく

会うたびに言葉や音を交換しわずかに上下している水位

感情は蝶　ことごとく翔び去ってはるかな花野から戻らない

現代人たち◇谷村行海

すっかりと冷たくなった精液のように晴れ間が差し込めてる朝
はてしなくジョジョにいそうな服を着て見慣れた街に繰り出す遊び
最高の寝ぐせがついてる人たちをシド・ヴィシャスと呼び走り去る人
後ろ前逆にスーツを着たならば彼は世界を征服するはず
ケンタッキー・フライド・チキンの隅にあるホストクラブの名前はケンちゃん
「団塊の世代が持ってる団塊の精子ももうじき引退らしいよ」
くいだおれ人形なんかにゃ負けないと見慣れたじじいが咳き込んでいる

現代を生きてる人のためにある速度落とせとその他の標識
何となく入った服屋の店内に流れていたのは誰かのため息
最高に童貞ルックな人たちの中に何人セレブがいるのか
コンビニの照明一つ落ちたころ誰かと目線があった気がした
童貞であった頃にはプルタブをもっと上手に開けたのだろうか
明日から天気がなくなるなんていう嘘を信じてチューハイ飲む日だ
目の前を電車が通るたびに思うよかった今日も生きていられた
名前さえ知らない人がだばだばと詰まっているけど恋人（ラヴァー）と思う

2014/2015(NewTown/Numbers)◇渡辺優太

一本の傘に二人が覆われる（そこには十臓十二腑がある）

全自動求愛装置を身につけてアイラブユーを百度となえよ

ゼラチンに沈められてるみかん見て東京湾のヤクザをおもう

天窓を開け放ち手を浸からせて夜の深さを確かめている

眼球に張り付いているふにゃふにゃが僕の世界を澄ませてしまう

僕の血をたどってゆけば誰とでもつながることができる　こわいよ

きみのいう「すてきないのちのみなもと」はすごい白くてどろどろしてる

あしゆびで上手に物をとる君は二遊間うまれ二遊間そだち

癇癪を起こした春を捨ててきた　そばにおいでよここはさみしい

四苦八苦どころじゃないよ十八苦三十六苦くらいくるしい

きみんちのタンスにぼくの断片を置いていくからたまに愛して

「外は雨降ってるくせにあたしたちキスばっかして喉乾いてる」

「セニョール」とイタ語を発音する君よ　アイプチが右目だけ取れてる

ペンネンネンネンネン・ネネム？　もうやめて！　ばけものの夢を見るのはやめて！

（水際だ）ここから向こうはきみの国　踏む土はまだ湿り気を帯びて

回っていたい◇青井硝子

遮断機の後に続いて踏み切りは世と世の境を引き寄せ放つ

五年後の二時半きみも此処にいて冷えたチューバに灯をともすこと

何事も聖書に在ると知っているわたしの背(せな)を突き刺す光

上昇し下降していくわたしたち擦り減り消えて記号になった

だいじょうぶ愛することも寝ることもステイウィズユー旅券を持って

（前夜）なら見ているだけも許される触れたベニヤの炎冷たい

均衡は容易く溶ける一日(ついたち)のアッシュトレイの山の頂

いつくしむという漢字は正にきみわたしの傍に寄り添ったきみ

冷静になって気付けばさざんかはさんざかとしてロケットに乗る

おはようを嘔吐する咽喉潰れても手話の作法できみを聞き取る

水準を維持する為にタグをつけ出荷されてく食用羊

「そういえば私同性愛者だわ」きみの書棚にマーカーを引く

こんなにも雨が降るんだ邪な世界でひとつ信仰をもつ

時差がある君の言葉を聞くときはいつも遠くのきみを見ている

きみたちは惹かれあうひと南極をぐるぐる回るサテライト、星

火傷するには程遠い◇榛葉純

朝靄にほえる子猫がキメている薬は八百屋の裏で買えるよ
劇場で再三再四めぐりあいアップルパイを食べにいったね
激甘のミートソースをすすりつつ破滅間際のカップルごっこ
みたいな？　誰かみたいな何者にならずに生きちゃだめだみたいな
関係のチューニングさえ失って泣きたいくらい音痴な敬語
「気まぐれなアバンチュールが集まって火事になるとかいう喩です」
この街のこどもは塾へ通わない　パイプ置き場に落ちた上履き

虹を待つあいだに出会う運命を探すさだまさしの幻影

本当は千変万化のわたしたち欠けてることも悪くないだろ

夕暮れのわくわく手提げ袋には缶チューハイとまるごとバナナ

こまやかな彷徨ばかり積みかさね keep out のテープぶち切る

幸福は温度に溶けているのです　湯の香ただよう秋の夜半すぎ

床板に触れるまなじり下ろしつつあいつに熱い茶をかける夢

にゃーって言われたらにゃーって言い返すことを許せる生活をする

人笑え　急勾配の階段にびびるふりして腕をつかむの

鯨◇村本有

水銀に沈む潜水艦のごと寝てた　六月、雨の日だつた

顫へてるあなた。背中に貼りついた髪。浴室にしやがんだままで

泥へ潜るやうに枕へかほ埋めてさつきから同じ着信ばかり

下校する小学生のこゑ遠し薄暮の部屋でホックを落とす

いつぴきの蠅が眠つてゐるきみの股の森から逃げ出せず　暮れ

まだ愛をしらぬ少女の太腿のごとき豆腐にしやうゆを垂らす

British Bar の鏡の皮膚にわれ鏡の貌となりぬしばらく

泳げない鯨　ぼくらはタクシーの熱砂へしづむ指からめつつ

唐突によぎる眩しい思ひ出の墓地に眠つてゐること　またね

わたしたち融けたチョコレートのやうに寝てた　音なきまひる　ギリシア

暮れなづむ中庭　きみのあまかつたリップ　鱗粉まみれのりやうて

庖丁のやうにひんやりしてこれは月光　きみがプールにうかぶよ

県道を走るタイヤの音さみし六畳に夜半ひとり醒めれば

ハイヒールのかたちに冷えてゐる泥を辿ればそこに仰臥の鯨

溶く墨のごとき風立つ砂浜を今やわたしがおまへを曳くね

ラスト◇堂那灼風

誰がための城だったのか静寂のマンハッタンに飛び交う小鳥
俺たちはここにいるぞと暗きから通気孔へと声朗々と
名前さえ忘れ去られたこれは冬　人代は地下にほのか華やぐ
かび臭いカレンダーとか雑誌とか見当違いの時代のままで
ざらざらの骨だお前は何を食いどこで暮らした下顎なのか
天高くそびえるビルの階段に花束だったものの飾り紐
意味なんてとうに失くした墓がありいつか誰かを送った鐘が

ぷっつりと道は途切れて打ち寄せる波にうっすら揺らめく廃墟
深淵に傾いだビルが林立し街路に響く子鯨の歌
故郷には季節がなくて国境もなくて輝く者がわずかに
極光の伝説は過去に追いやられ夜空に昇る子狐の息
クモの巣と埃だらけの信号が小さな獣の接点となる
停止した旧都の影よ脈を打て点々と赤を投げながら行く
乾風になびくコートは夜色でちらつく置いてきたものばかり
魂の形を描け野ざらしの鍵盤が織る黒白の音

すぐに映画がありますように◇永井亘

惑星は遠く照らされながら死ぬ　気づくと君の顔を見ていた
感情にまつわる語彙のつたなさで緑茶の湯気が涙に変わる
ぞんざいに答えるたびに宵闇の灯台の灯を見るまなざしに
どんな野のどんな嵐を喩えてもあなたは海を思い浮かべた
お世辞にも月は綺麗でないけれど何も言わずに月を見ている
過ぎ去った日々の話はたやすくて流れる星はとても綺麗だ
ポケットにくずれた紙のあることも悲しい半月のクレーター

ああ菓子パンがおいしくておいしくて　ファミマのごみをセブンで捨てる

できるだけ少ない語彙で繰りかえす幼稚な歌の歌詞に泣いてた

新月の誰も知らない海、僕とあなたの文字がこれから狂う

チョコレートばかり食べてもいい夜の気配がしたら夢のつなぎ目

夕凪のスプリンクラー　忘れてもわすれなくてもひかりまみれに

百人のサンタクロースのプレゼントを入れても大丈夫な靴下を履く

ライターで少し焦がして死のような星の匂いに泣いて笑って

ドア越しに聞こえる声の哀しみに、すぐに映画がありますように

生きてゐた顔◇松本宗久

人ひとり消し去るごときしがらみをやすやすと逃れ来たりし雨は

救急車に乗せられしこと七度ありてその度ごとに違ふ隊員

蒔かれたる種のいくつが地に埋もれ芽を出(いだ)さずに腐ちてゆきしか

今日の暑さを伝へしのちにガザ地区で一〇〇人超が死にたりと云ふ

昂れるこころをきみはもてあまし夜半の饒舌のうとましきかな

切られたる汝が手首を流れくる赤黒き血の滴るが見ゆ

精神を病める者らを閉ぢ込めてあくまで白し閉鎖病棟

われのみが冬のさなかにゐるごとく肌寒き夕雨は降りきぬ

海、そして月のひかりに誘はれ常世への橋を渡りし汝よ

花びらに埋もれて汝は苦しからむ死に顔といふは生きてゐた顔

一本のつげ立ち枯れて死の匂ひまことしづかに死んでゆくらし

自殺せし汝に呼ばるるごとき夜肉体は重き鎖となりぬ

遠景に死火山　野をゆく縞馬の右うしろあしは跛（びっこ）をひいて

火のやうな水のやうなる物語横抱きにしてわれらは行かむ

ネクタイを一年ぶりに締めし日にすがしきものは大きなる窓

フォークロア◇山崎有理

ほお杖をついたかたちの標本のまき場のように聞こえない歌
雨上がりにひどく凍える手をつなぐ動物が苦手な飼育係と
老いているかれらはサンタクロースの格好をしたサンタクロース
怪獣が赤信号の無視をしたときを合図に倒す予定だ
レシートは嘘をつけないカフェオレを垂れ流してる夕がたビルに
工場がいつも通りであるという生中継をつないでやった
えびの尾が落ちてくる冬雪解けの前の川にも降り積もる冬

靴底に駅をかくして逢いに行くりんごごりららっぱを駆け上がる日に
街じゅうで翼を生やせばうつくしい動物を見つける真夜中に
どの家もコントをしてて団地なのに自動ドアが多すぎるだろ
パラシュートみたいみかんの網が開き迷彩柄の草地に跳ねる
七夕の笹に年々ほんとうのコウノトリがくくりつけられ
いきものが素直になるには道沿いに扇風機のコンセントが足りない
年齢のカウントをする声がありフォークダンスはやさしくつづく
朝から夜までと夜から朝までを等しくしたやつは気が狂っている

硬質のなかの熱量◇渋谷美穂

巡礼のごとく皆人帰りゆくどの交差点も十字架として

夕暮れに焼かれたレールを打ち鳴らし電車は走る我らをくべて

火花散らす工事現場の群星がメトロポリスの銀河となりゆく

もう開かぬマクドナルドの電球をひとつひとつと朝日が照らす

この道にどこまでもどこまでもツツジツツジ　やがて初夏へとたどり着くまで

乗りすごす先の駅には草むらがただ真昼間として日差しを受ける

雲が立つ　大地の熱気を吸い上げて沸騰させゆく我らの狼煙

どの避雷針にも落ちなかった雷を集めて光る地上の全てが

銀色の水道管がどこまでも走る少女に水を与える

スコールが水となっては残りゆくこの窓べりに硝子があれば

梯子かけ区切りゆく空ひとつだけ太陽を得る特権の空

澪標昨日も明日も眠ってる誰も降りない乗らない駅で

ケーブルにゆらさてゆく揺籠に抱かれわたる岸辺のどこかへ

冬枯れとあらゆる命が刈られてもすべての曼珠沙華は倒れず

なぜ人は赤く生まれてくるのかとかき混ぜ灯す篝の炎